

「元旦」に一被災者となって

田中成行

能登の七尾の元日の海を、グランドの芝生に座り眺めていた時、どおんと地面と空と海が揺れつづき、携帯の警報が鳴りやまず、「大地震です。津波の恐れがありますから、海から離れてください…」等のゆっくりな女性のアナウンスの音が、拡声器から繰り返された。どこに避難したらいいのか。

能登半島の入り口七尾湾岸にある和倉温泉のビジネスホテルで（観光ホテルは満員）、仕事をすつつもりでリュックに本を詰め込み大晦日の夜一泊し、元日の午前中に共同湯に入り、温泉街の外れのグランドで仕事をしようとした午後四時10分だった。

直前に犬の散歩の方が通った後の海際の歩道は一瞬ですたずたに。避難しようとした丘は一気に崩れ土砂が歩道を埋めた。切れた電線等を避けホテルに戻ると大阪の方はテレビが飛んで来たと言ひ、栈橋で願い事を叫んでいた若者は橋にしがみつひ、這って戻り、「何で正月に」と呆然とする。

観光客は避難所へ行くので、私は十一キロ離れた実家まで三時間かけて夜道を歩いて帰った。真っ暗な国道沿ひの歩道は液状化もあり、裂けて

めくれ上がり、ブロック塀は至る処で倒れて歩道を埋め、海に近い病院の明かりが希望のように灯っていた。

壊れた水道栓から水が噴き出し、走って過ぎる。実家は断水停電ゆえ、近くの従兄の家に泊めて頂いたが、前回の地震で大黒柱にひびが入り、余震の度に飛び出し、結局納屋で夜を明かす。飲み水もトイレの水もない断水は厳しい。

翌日鍵が折れて飛んだ実家の玄関を開け、一昨年亡くなった両親の写真の砂埃をぬぐひ、壁の割れ落ちた部屋をごしごし磨いた。神棚が寢床に落ち、厚壁が割れ障子を折り刺さっている。

そんな片付けの中、何人かの友人や近所の方が来てお話するのは実に心強い。団欒の中犠牲になったご家族もあったが、家の安全な場所はどこか確認が必要。今、又どおんと余震。地震は時を選ばない。高齢化の能登の独居や老々介護の方々や、地域に生きる若者一人ひとりの物語に寄り添ひ本気の対話を今後も重ねたい。

（筆者は研究大会で総合司会を務めた。正月に実家のある七尾市に帰省中被災した。）